

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して(一九〇)

文出水 康生

戦国おもしろ百話

阿波寺澤氏の繁栄の跡を探求する

一期会の出会いの不思議おみちびきお歡びの宴

めだかの学校

誰が生徒か先生かと皆で仲良くお遊戯する風景は平和な共生・共存・共楽の姿である。退転後に徳島県シルバール大学の講師として「めだかの学校」で生涯学習を共にする。現役教師として「すぐめの学校」で鞭を振りふり教育したことをも偲びながら、元気が一番有言実行・言訳無用を豪語して「先生と後生が同時に生きる」「四五〇年の昔と今、今この時に生きる」として、陽気にエイツ、エイツ、ウォーと勝ち鬨を高らかに合唱する。半世紀を越えての文武両道で共に活動した出会いの人数は



大正期までの寺澤氏邸宅(小松島市横須)



現代の寺澤氏邸宅跡



寺澤氏邸宅に隣接した一族墓所の「遠祖代々祖等親族奥都城」石碑



寺澤家の「入子菱」の家紋風呂敷



伝承の狩野栄川院典信の掛軸と天秤はかり



座元「魚屋寺沢の阿波藩札」、最初の延宝札(左から3枚目)と享保札



中田八幡宮に寄進された永代常夜燈、藍商寺澤市兵衛の名を刻む

教務手帳「エンマ帳」三七冊に記載される八五四二人の名を基礎に現在も二五〇〜二〇〇人の「教え子」が毎年が増える。あれこれの会合講演などでの出会いが尽きることがない。名刺ファイルが増える。お陰さまで、と感謝の念で一杯。「宿題」は先生が生徒に出すのが常識とされるが、誰が生徒か先生かの時には、その昔の生徒が恩師に「宿題」を出し、それに応えて共に「無知の知」を楽しみルーツ・歴史探究のおもしろさを共感する。盛大な結婚披露宴で「親と恩師は永遠に親と恩師やで…」と説きながら祝福し、来賓との笑顔の写真を後日に新郎新婦が

届けてくれ、十項目の質問が宿題とされ、その回答。

蜂須賀氏の阿波入国

戦国天下人三好長慶・戦国三好一族が阿波讃岐淡路を本拠として京畿堺の「天下」を支配したのは織田信長の怒涛の上洛の直前二〇年の二五四九〜六八年であった。三好氏の天下支配に代わって、その天下を支配する「天下布武」の旗幟を信長が掲げる。三好氏の威勢が衰亡して織田信長・豊臣秀吉の威勢が隆盛して時代が変わる。信長・秀吉の下で台頭する蜂須賀正勝・家政父子が、土佐の長宗我部元親勢に本能寺の変後に制圧

されていた阿波に入国する。四国平定のために豊臣秀吉軍一〇万が現在の本四架橋の三方面から天正十三(三五八)五年四月に攻め入り、阿波を主戰場として戦われ、宮城攻めの在陣のままに蜂須賀正勝が四国国分けによって阿波国主に封ぜられる。老齢の故をもつて正勝が辞退して家政が阿波国主に封ぜられる、それが六月のことであった。蜂須賀小六正勝は出世する秀吉の第一の功臣として播州龍野六万三〇〇〇石の大名に最初に封ぜられた。姫路からの黒田官兵衛、備前からの宇喜多秀家隊と共に阿波に出陣し、長宗我部元親を土佐一國の安堵で押し込め、三好氏の故国で最重要地とされた阿波が蜂須賀氏に与えられた、置塩領(赤松則房)二万石、毛利兵橋領千石余を除いた十七万五千七百石。阿波で信長・秀吉の織豊政権の統治理念による天正検地・兵農分離が実行されての「二円支配」が行われる。徳島城築城・城下町形成が行われ、細川

三好氏の拠点であった勝瑞(藍住町)から統治の中心が渭津から改名された徳島に移る。龍野六万石から阿波十八万石の三倍近い封地となった蜂須賀氏が故郷の尾張・封地の播磨や各地からの人々や細川三好氏の遺臣を含めて家臣団が編成され、農工商の身分の人々が城下町に生活基盤を形成する。徳島城を中心に二宮・撫養・富岡・脇・池田・海部・川島・板西・仁宇が九城とされて要地とされた。徳島城下町形成が周辺の地域に変化を与えながら形成され、その城下町形成に小松島の地が重要な補完的な役割を果たして郷町として発展する。その発展の中心的役割を寺澤一族が果たす。

蜂須賀氏家臣の寺澤氏

蜂須賀氏家臣の寺澤家は「阿波藩翰譜」に中老とされる益田系寺澤式部家(五〇〇石)と物頭とされる青山梯系寺澤主馬家(五三三石)がある。式部家は蜂須賀家政の実

母マツ(大匠院)の兄の益田内膳正正忠の長女が益田蔵人正信に嫁いで生まれた寺沢式部正質を初代とする。正忠は蜂須賀氏の阿波入国で家臣団編成の時に尾張から阿波に来て撫養城主となつて家政を助ける。ただ正忠の弟の益田正の子の益田豊後長行が海部城代であつた時に、海部分藩の「益田豊後事件」を起こして幕府裁定の重大事件となり、益田長行父子らが処罰されたことで益田氏の一族が藩主命で改名して寺澤氏や仁尾氏を名乗つた。物頭の寺澤主馬家は元は青山平右衛門雄継を初代とし、家政が関ヶ原合戦の時に高野山に登つた時の身付衆十二人の一人であつた。武略に長けて城攻めの時に橋を架けた功で小六正勝から梯の姓をもらつていた。その後、幕府の要人の寺澤越中守が阿波国視察に来た時の饗応役を勤めて、その寺澤氏を拝領して青山・梯姓から寺



寺澤・多田家の植林した小松島松原を復元の現状と弁天島



現代に営業する「マテリア」と寺澤毅専務



新郎・新婦を中心に来賓の面々

印刷され、その役割と信用維持の重要な注目にされる。座本は初期には銀札

澤姓を名乗つた。なおこの他に『阿波藩土譜』に寺澤藤大夫(三五〇石)、寺澤仁助(二五〇石)、寺澤長右衛門(十二人扶持)七石が記録される。

阿波藩札座本人寺澤氏

阿波藩札銀札が延宝八(一六六〇)年に発行された。吉野川平野で阿波藍が大量生産され、それを木綿布の普及によつてその染料として全国津々浦々の紺屋に阿波藍商人が供給して「阿波の藍か藍の阿波か」と謳歌された。阿波藍商人の全国的な活動が阿波藩札の価値を支え、他藩のものより高価値を維持して明治維新の「新貨条例」による貨幣改革まで流通した。金・銀・銭の本位貨幣の補助貨幣として、藩財政の窮乏救済の目的と共に貨幣経済の普及とその規模拡大の需要に応えるものとして大量に発行され流通する。

阿波藩札の座本人札元藩札引受人に魚屋・寺澤の名が

場の引受人として藩札及び金銀の出納責任者で、藩財政貨幣政策を代行し、なおその流通・信用維持保障を図る重要な存在であつた。魚屋長左衛門は堺の千家の一族で千利休が納屋衆として魚屋を名乗つた。家政が高野山に登る時に剃髪して蓬庵を名乗つた堺の千道通家が阿波千家として徳島城下に移住して初期豪商となる。千利休と三好長慶は大永二(一五二二)年の同年生まれで終の住処を京の大徳寺聚光院堺の南末寺とし、正室は長慶らの姉妹とされる。魚屋長左衛門の跡を示す五輪墓碑が眉山の麓の瑞巖寺に現存する。

寺澤六右衛門も魚屋長左衛門と共に蜂須賀家政と密接な関係を持った。そのことが阿波藩の最初の阿波国史で赤堀良亮が編述して十八世紀中期に刊行された『阿府志』の巻二(九)に伝承した史料の収録と共に賞賛されて記録されている。赤堀良亮の評定として「按ずるに寺澤氏の一人の力に依て小松島浦寺社共千軒余を改起し其余御代々への勤功は尤も良民と謂うべきかな」とする。また寺澤氏の根源について「良民、勝浦郡小松島住人寺澤氏は根元播州

高砂の神官とも言う。天正慶長の頃の御跡を慕いて来り手束の氏を改め寺澤四郎右衛門同姓に仰せ付けられ、右家に伝わる所の御書並に御記文写」として克明な史料が収録される。それによると徳島城下の新町に居住して六右衛門小路の名を残して一族が居住して商業活動を行う。本家の寺澤六右衛門・六左衛門は郷町小松島形成の主役として、横須の地に邸宅を構えて、寺澤姓十一人、森姓三人、手束姓四人、湯村姓一人、井上姓四人、田中姓二人の総計三十二人が寺澤六右衛門の親子兄妹甥として長谷川越前より「刀脇指御免絹布着用御免」の特権が与えられ、山内松軒と共に小松島の地の代官を勤め、勝浦川・那賀川筋の木材など産物の「五分二所」の管理をして蓄財して富豪となつた。蓬庵を称する家政が豊国神社豊林寺を大坂冬の陣直前に建立して小松島に居住したこと

で地蔵寺へ往来して寺澤六右衛門らと交流し、六右衛門は家政の葬儀の時に剃髪して宗齋を名乗り、地蔵寺の過去帳に慶安三(一六五〇)年十二月二三日の死亡で貨傑宗齋禪定門の法名が記録される。横須の百間と二百間の土地が与えられ横須の松原を、その延長に多田家が植林して小松島松原を形成し、その復元を筆者が一九九九年にして写真のような現状となつている。寺澤氏が蜂須賀家政以来の歴代の殿様と親交を結び、特権的な地位の豪商として京・江戸での銀子調達をし、その財力と名望によつて阿波藩札の座本人となる。そして六左衛門を祖として魚屋久兵衛の屋号で寺澤市兵衛が阿波藍関東売仲間として播磨屋九兵衛の松浦家と共存して江戸店を持ち上野高崎を売場としていた。その跡が八幡社の永代常夜燈に刻まれている。明治十六年の「阿波長者番付」に寺澤六郎が頭取、寺澤市郎が世話人に記載されている。このような由縁を持った寺澤氏が木材を扱う「寺澤木材」として、安宅水軍の船大工の技法を伝承した鏡台・仏壇製造の地場産業を支え、常三島から昭和四十七年に津田木工団地に移り、平成三年に寺澤木材から(株)マテリアに商号変更し、平成六年から沖洲マリニピアで営業する、代表取締役社長寺澤基博、息子の専務取締役寺澤毅さんが十六代目、社長夫人が寺澤恵子さん、専務夫人が新婦のひかるさん。